

大事なのは宗教ではない。兄弟たち！

アミール・ツアルファティ

- ローマからのメッセージ -

<https://youtu.be/3GCrTJxZP6Y>

ローマから、おはようございます。私の後ろにあるのは、ヴァチカン市国です。実際、ここは、ただの都市ではなく、国家です。ここは人口的にも国土面積においても世界で一番小さい国家で、面積は、たったの0.445平方キロメートル、人口は、たった千人、独立国家ですらありません。国家の主権者はカトリック教皇庁、教皇自身で、世界中で唯一、政府ではなく、教会が統治している国家です。



あの大きなドームは、有名なサンピエトロ大聖堂。

そして次に、あの、とても大きな円形の建物ですが、あの大きなドームは、有名なサンピエトロ大聖堂。世界中の13億人にとっての、神聖な場所です。地球上で最も人気があり、最も人の訪れる場所の一つです。ところで、これは初代聖ペテロ大聖堂ではありません。本来の聖ペテロの教会は、4世紀、ここに最初のクリスチャンの皇帝であったコンスタンティヌス1世によって建てられました。美しいバシリカ様式の教会を建てるのに30年かかり、その教会は千年近く続きました。この教会は、様々な教皇の全て

の戴冠式が、その中で行われ、その中には、西暦800年12月25日のカール大帝の戴冠式も含まれます。彼は、初代神聖ローマ皇帝となった人物でした。皆さんには奇妙に聞こえるかもしれませんが、ローマ帝国が崩壊し、地図から消え去ったとき、その後、約500年間何もなく、それが西暦800年に、再びローマ帝国が現れたのです。カール大帝が、フランス、ドイツ、イタリアの一部を統合し古代ローマ帝国の崩壊以来初めて創設した時、再び、一人の西ヨーロッパ人指導者が、西ヨーロッパを支配しました。このようにして、神聖ローマ帝国という名前が与えられました。それは、その戴冠式が、そこに建っている古い教会で行われたからです。もちろん、それが西暦800年のことで、それは1806年まで存続しました。皆さん、神聖ローマ帝国を消滅させたのは、ナポレオンだけでした。

さて、多くの方はご存じないかもしれませんが、神聖ローマ帝国の中核は今日のドイツで、神聖ローマ帝国は、第一帝国と見なされました。ヒトラーが第三帝国を始めた事は誰もが知っていますが、でも、誰も「待てよ。第一、第二は何だ？」とは考えません。さて、第一帝国は千年以上存続し、そしてそれは、このローマで始まったのです。このことは重要です。なぜなら私のメッセージの多くで、将来現れる世界的な指導者について話していて、その人物は、復活したローマ帝国から出現します。そして、彼は西ヨーロッパ、今のドイツから現れると私は信じています。ですから、私たちが今いるのは、間違いなく西ヨーロッパの中心、とても重要な場所です。さて、私たちの後ろにある、この教会は、14世紀の中頃に建築が始まり、そして続く120年の間、様々な教皇、様々な建築家、様々な芸術家が、当時の世界の中で最も驚くべき建造物の建設に従事したのです。初めて実際にこれを始めた…というか、「新しい聖堂が必要だ」と考え始めた教皇、…古い聖堂は老朽化していましたから、それは、教皇グレゴリウス5世でした。グレゴリウス5世は、生きていた間にこの教会の建設を見ることは、ありませんでした。しかし、彼は、生きていた間に土台が造られるのを目にしました。



14世紀の中頃に建築が始まり、

さて、ここで、面白い小話があります。建物の資材を手に入れるために、当時、ローマでは、建築資材が不足していたので、資材を入手するために、彼はコロッセオの解体を命じたのです。現在、コロッセオを訪問

すると、およそ半分が、なくなっている事が分かると思いますが、それは、教皇グレゴリウス5世が、ティベレ川を渡って、石を積んだ250台の荷車を、コロッセオから運んだからです。さて、とても面白い事に、



石を積んだ250台の荷車を、コロッセオから運んだからです。

コロッセオに行くと、ご存じのように、元々それは西暦72年に戦争の戦利品から建てられたもので、皇帝ティトゥスが、自ら認めています。それらは、その一年半前、エルサレムでユダヤ人と戦った戦争で、彼は神殿を破壊しただけではなく、全ての宝物を持ち去ったのです。そして彼は、全世界に向かってそれを明らかにする為、コロッセオの向かいにティトゥスの凱旋門こんりゅうを建立したのです。興味深いことに、そのアーチの内側に、ユダヤ人奴隷が神殿の宝物をコロッセオに運ぶ行列全体が描かれています。私が言いたいのは、コロッセオは、エルサレムでの戦争の略奪、戦利品で建てられた、ということです。そして、後になって、信じられないかもしれませんが、約450年後にヴァチカンの大聖堂が、コロッセオから取ってきた石で建築されたのです。つまり、ポイントは明確です。エルサレムの陥落と、この大聖堂の建築との直接的な接点が見えるでしょう。建築資材を通して。

さて、皆さんにご理解いただきたいのは、私たちが今ここで見ているのは、驚くべき建築物で、その向かいに、もう一つ、驚くべき建築物が建っています。それは、かつてサンピエトロ大聖堂が建てられるまで、ローマで最も高い建物でした。それは、もちろん、サンタンジェロ城。基本的には、“聖天使”で、つまり、大天使ミカエルです。その像が屋上に設置されており、そのブロンズ製の像は、1700年代に設置されました。

5世紀に、教皇グレゴリウス1世が、大天使ミカエルが深刻な疫病を終息させた幻を見たことを記念したものです。その疫病により、ローマでは多くの死者が出ました。ご覧のように、あの天使は剣を鞘におさえているところで、まるで、たった今、疫病を終わらせたかのようです。さて、あの像は天使の幻を記念したのですが、この建築物全体は、元々2世紀に建てられたもので、2世紀にエルサレムを破壊した皇帝の大霊廟だいいいびょうです。またしても、エルサレム破壊との何らかの接点がこの建物でさえ見られます。2世紀中ごろに支配した皇帝ハドリアヌスは、エルサレムを破壊した人物です。彼は神殿は破壊していません。神殿を破壊したのは、西暦70年、ティトゥスによってでしたが、彼はエルサレムの市街を破壊しました。彼は市街を破壊し、その上に、アエリア・カピトリーナと呼ばれる街を建てました。皇帝ハドリアヌスは、“パレスチナ”、という名前を造った人物でもあります。パレスチナという名前は、それまで誰も使ったことがなく、ただ、旧約聖書で、ペリシテ人の土地を呼ぶのに用いらただけでした。それをハドリアヌスが、イスラエルの地を旧約聖書の中のユダヤ人の天敵にちなんで名付けたのです。ユダヤ人を辱めるために。なぜなら、102年から105年の間にユダヤ人が、彼に反逆しようとしたからです。実は私がネックレスにつけているこのコインは、表面にしゅるの木が彫ってあって、これは、2世紀の皇帝ハドリアヌスへの反乱の時ユダヤ人の反逆者によって鑄造されたものです。ですから、反乱があつて、皇帝ハドリアヌスが反乱を鎮めた事おさが分かっているだけでなく、大量の遺物も今日まで残っているのです。ハドリアヌス自身も彼の遺灰が、まさにこの場所に埋葬されています。彼の妻と彼の



そのブロンズ製の像は、1700年代に設置されました。



表面に、しゅるの木が彫ってあって、

養子の遺灰、そしてもちろん、その後の多くの皇帝のものもあります。その中には、カラカラ帝のものもあります。ところで、彼は、当時のローマで、最大の浴場を造った人物です。ニューヨークのペンシルバニア駅の建築に影響を与えた浴場です。1963年に解体された、古いペンシルバニア駅の事です。という事で、今話しているのは、とても重要な建物で、それが後に、14~15世紀にこの建物が造られると、その霊廟は城に改築され、教皇の避難所になりました。教皇がトラブルの時、どうやってサンタンジェロ城に逃げたかという、800mの長さのパセツトと呼ばれる回廊があるのです。パセツトは、少なくとも2回、教皇の避難経路として用いられ、教皇アレクサンデル6世が1494年に通りました。フランス王シャルル8世が侵攻し、教皇の命が危機に陥った時でした。しかし、もっと有名なのは教皇クレメンズ7世で、ローマの略奪の間に、この回廊を通して、安全地帯に脱出しました。それは1527年のことで、神聖ローマ帝国の兵士、

元々800年に、この場所で戴冠を受けた人物でしたが、今回はカール5世で、スイス人衛兵をサンピエトロ大聖堂の階段で、ほぼ全員虐殺しました。さて、この2つの建物が、ここローマの聖座の歴史においてとても重要な役割を担っていることが分かりました。そして、この2つが、パセットによってつながっている事も分かりました。それは、今日も残っています。

さて、今回は、ただヴァチカンや、サンタンジェロ城や、それらをつなぐ回廊について話す為に来たものではありません。今回お話ししたいのは、13億人以上の人々が属しているある宗教が、自分たちこそが本物で、真の教会だと主張している事実についてです。リーダーたちが、自分たちは使徒の子孫、継承者であり、その最高指導者はペテロの継承者であると主張している、ある宗教についてです。それがもちろん、あの教会が、サンピエトロと呼ばれる理由です。あの円形建築物の内側にあるのは、マタイによる福音書16章で、

「あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。」(マタイ16:18)

彼らは、それを文字どおり、ペテロが岩であり、ペテロの上に教会が建てられ、そして、もちろんこの教会がその場所だと受け止めています。非常に重要な詳細は、今日のヴァチカンは、トラステヴェレと呼ばれる地区に位置していて、それは“ティベレ川の向こう側”です。古代には、そこは貧困地区で、多くの場合において、アウレリアヌス城壁の外側にありました。つまり、古代ローマの市外で、当時の共和制ローマの政府の中心から離れた場所でした。興味深いのは、もし1世紀までさかのぼると、ヴァチカンもカトリックも存在せず、カトリックの教会は、どこにもありませんでした。むしろ、その地区には、およそ5つのシナゴグがありました。そこにはローマに住んでいるユダヤ人の大きな共同体があり、そして、当時は、あそこが彼らの居住区でした。“ティベレ川の向こう側”、トラステヴェレのあの地区です。ですから、パウロのローマ人への手紙について話すとき、皆さん、覚えていなければいけません。彼は、後にカトリック教会に発展した一つの教会に語っているわけではありません。彼は、実際には律法についての知識を持った人々に話していたのです。モーセの律法です。事実、ローマ人への手紙7章1節でパウロは言っています。

「それとも、兄弟たち。あなたがたは、律法が人に対して権限を持つのは、その人の生きている期間だけだ、ということを知らないのですか—私は律法を知っている人々に言っているのです。—」(ローマ7:1)

パウロは承知の上で、ローマの人々、ローマの教会に話しました。ローマの教会は、実際には主としてユダヤ人が多数を占めている事、彼らは福音を聞いて、イエスがメシアであると信じるようになった人々で、この人々は律法を知っている事、彼らは、モーセの律法を理解している事を念頭においておいてください。異邦人の宗教には、モーセの律法については全く分かりませんでした。それから念頭においておいてください。当時、彼らにとって、たぶん後ほど「知られていない神」の中でアテネの異教徒について話しますが、彼らには、“唯一の神”という考えはありませんでした。彼らには世界の創造という考えはなく、進化論であり、彼らにとっては、神々はとても離れたところにいて、そして、私たち人間とは直接の接触はないと考えていました。要するにこうです。パウロがローマ人へ書いた手紙の全体を通じて、…私達は忘れてはいけません。ここには、サンピエトロ大聖堂はありませんでした。サンタンジェロもありませんでした。この地区にはシナゴグがあり、ユダヤ人の共同体がありました。パウロは、とても明確でした。彼はユダヤ人たちに、メシアのメッセージを理解してほしかったのです。とても明確です。そして、パウロは宗教に対して、非常に問題がありました。

今朝のメッセージのタイトルは、「大事なのは宗教ではない。兄弟たち！」なぜなら、ユダヤ教から抜け出したパウロが、パリサイ人であった彼が、迫害する側であった彼が、聖書は告げています。「**サウロは教会を荒らし**」(使徒の働き8:3) 彼には、宗教に問題がありました。なぜでしょうか。ところで、「宗教」という言葉は、念のために言いますと、聖書には出てきません。一言も、です。宗教とは人が作り出したものです。それは人が作り出した道であり、より高い存在への、信仰もしくは信条を表すためのものでした。しかし、この言葉は旧約聖書には一言も出てきません。ですから、当時は「ユダヤ教」というものは存在しなかつ

たのです。そして、もちろん「キリスト教」は決して宗教として作られたのではありません。むしろ、生きる道です。実は、使徒の働き9章1-2節で、聖書はこう言っています。

「さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅かして殺害しようと息巻き、大祭司のところに行って、ダマスコの諸会堂宛ての手紙を求めた。それは、この道の者であれば男でも女でも見つけ出し、縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。」(使徒9:1-2)

それは宗教ではありませんでした。それは道でした。彼らは、「この道」と呼ばれていました。彼は、こう言うこともできました。「この新しく創設された世界宗教、キリスト教に属する者は誰でも縛り上げて、エルサレムに引いて来る。」でも違いました。そうではありませんでした。事実、彼らはもはや、ユダヤ人ではない、とも言いませんでした。彼らは、「その道」を選んだユダヤ人だったのです。興味深いことに、私たちはイエスがこう言った理由を理解できるでしょう。

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」(ヨハネ14:6)

彼は、「私は新しい宗教の創始者である。信じなさい。私は新しいものである。」とは言いませんでした。違います。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」(ヨハネ14:6)パウロが、ローマ人に手紙を書いているとき、ローマ人への手紙3章で、彼はローマ人に向けてこう言っています。

「それでは、ユダヤ人のすぐれている点は何ですか。」(ローマ3:1)

なぜパウロは、ローマ人に対して、ユダヤ人について語ったのでしょうか。

「割礼には何の益があるのですか。あらゆる点から見て、それは大いにあります。第一に、彼らは神のことばを委ねられました。では、どうですか。彼らのうちに不真実な者がいたなら、その不真実は神の真実を無にするのでしょうか。決してそんなことはありません。」(ローマ3:1-3)

パウロは、ローマ人に言いました。「聞いてください。あなたがたは、理解しなければなりません。ユダヤ人は、置き換えられたのではなく、無視されたのでもありません。彼らには、確かに大きな利点があります。彼らには、神のことば(オラクル)が委ねられました。」そこで私は、「神のオラクル」とは何だろう、と思っていました。ところで、ギリシア語ではロギアと言って、それはロゴス、神のことばを意味しています。興味深いのは、「神のオラクル」とは神のことばであり、使徒の働き7章38節、ヘブル人への手紙5章12節、ペテロの手紙第一4章11節、ローマ人への手紙3章2節に出てきます。私たちは、申命記4章7-8節、詩編147編19-20節について話してきたわけですが、実際、詩編147編19-20節を、少し朗読させてください。

「主はヤコブには みことばをイスラエルには、おきてとさばきを告げられる。主は どのような国々にもこのようにはなさらない。さばきについて、彼らは知らない。」(詩編147:19-20)

言い換えると、地球上の他のどの国も、それを保ち、後になって広める為に、神のことばを受け取った事はありません。それはイスラエルの役割の一つで、その為にイスラエルが選ばれたのです。そして興味深い事に、全ての焦点は「大事なものは宗教ではない。大事なものは神のことばである。」そこで問われるのは、「あなたは、神のことばをどう扱うか」伝統に従って何をするかでもなく、ものごとをどう取り扱うかでもなく、神のことばをどう扱うか、です。面白いと思いませんか？あなたが知っているだけでなく、理解しているとき、全てが意味を成してくるのです。そこで問われるのは、あなたは本当に知って、理解しているか？聖書全体を通して、神は一方で、イスラエルの民にオラクル、ことばと戒めを与えられました。しかし同時に、神はイスラエルの民に言い続けています。

「従順は、いけにえに優る。聞き従うことは、いけにえにまさり」(サムエル第一15:22)

神は、当時のイスラエルの民に語られ、そして今日、同じように世界に向けて語っておられます。

「私たちの心が正しくなければ、いけにえは何の意味もない。」イザヤ書1章11-15節で、預言者イザヤはイスラエルの民に語っています。

「『あなたがたの多くのいけにえは、わたしにとって何になるろう。—主は言われる—わたしは、雄羊の全焼のささげ物や、肥えた家畜の脂肪に飽きた。雄牛、子羊、雄やぎの血も喜ばない。あなたがたは、わたしに会いに出て来るが、だれが、わたしの庭を踏みつけよとあなたがたに求めたのか。もう、むなしいささげ物を携えて来るな。香の煙、それはわたしの忌み嫌うもの。新月の祭り、安息日、会合の招集—わたしは、不義と、きよめの集會に耐えられない。あなたがたの新月の祭りや例祭を、わたしの心は憎む。』

(イザヤ1:11-14)

想像できますか？ユダヤ人として毎週土曜日、全ての祝日にシナゴグに行き、私が初めてイザヤ書を読んだ時、それはイザヤ書1章でした。神が、イスラエルの民に、言っておられるのです。「わたしはあなたがたの安息日、新月の祭りや例祭を憎む」それを読んでわたしは、「ちょっと待って！憎むってどういうこと？あなたが私たちに与えたのですよ？安息日を守りなさい、例祭を行いなさい、と言ったのはあなたです！憎むとはどういうことですか？」神は言われます。「理解しなさい。」「あなたがたの手が血まみれの時、わたしはそれを喜ばない。」神は、「そんなものは一切要らない」と言われるのです。神は御座に座り、心が正しくない人々からのいけにえを一日中必要とするような神ではありません。失礼ながら、当時のユダヤ教は、今日のユダヤ教と同様に、今日のカトリックと同様に、他のあらゆる宗教と同様に、腐敗で満ちていました。人々は神のことに従わないだけでなく、神を個人的に知りません。興味深いことに、神はご自分が選んだ民に、こう言われたんです。「あなたがたの心がそこには、それらを祝ってほしくない。」神は彼らに言われました。

「あなたがたの新月の祭りや、例祭を、わたしの心は憎む。それはわたしの重荷となり、それを担うのに疲れ果てた。あなたがたが手を伸べ広げて祈っても、わたしはあなたがたから目をそらす。どんなに祈りを多くしても聞くことはない。あなたがたの手は血まみれだ。」(イザヤ1:14-15)

わお。神は、今日でも世界に向けて語っています。「教会に行く事でクリスチャンになるのではない。駐車場に立っていても、人が車にならないのと同じ。鳥小屋の中にいても、人が鶏にならないのと同じ。」あなたがどこに行き、何を言い、どう振舞うか、という問題ではないのです。人はみな演技できます。今日では、皆がSNS上でキャラを演じています。皆が、自分自身のディレクターと役者を同時にこなしています。皆さん、神はご自分の民に言われました。

「人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」(サムエル第一16:7)

神が、イスラエルの新しい王に油を注ぐためにサムエルを遣わされた時、サムエルは、ダビデの兄弟たちの所へ行きましたが、彼は、ダビデがその人だとは思いませんでした。そこで、神がサムエルに言われました。「サムエル、彼らの容貌を見てはならない。それは、わたしではない。民はサウルを王に選んだ。なぜなら、彼は背が高くハンサムだからだ。わたしは心を見る。」私が見る限り、ダビデは羊飼いの少年でした。当時は、皆、羊飼いを嫌っていました。臭いから。「彼がそれだ。彼はわたしが好む心を持っている。」ご存じのように、ダビデは、もちろん、あらゆる点で今日の宗教的な人々から非難されるでしょう。ダビデは、今日の宗教的な人々から石打ちの刑にされるような事をしました。でも、神は理解しておられたのです。大事なものは、その人が完璧かどうかではなく…、ところで、神は決して完璧な人を探していません。そんな人はいないからです。(笑) 聖書にはこうあります。

「神は天から人の子らを見おろして、神を尋ね求める、悟りのある者がいるかどうかをご覧になった。善を行う者はいない。ひとりもない。」(詩編53:2-3)

神はすでに、創世記2-3章で分かっておられました。人は墮落した被造物だと。人は、明らかに救いが必要だ、贖いが必要だと。ダビデが偉大だったのは、彼が完璧だったからではありません。それは、彼が自分の不完全さを理解し、認めており、そして、神の御霊が自分から去っては困る事を理解し、神を必要とし、神との親密な交わりが何よりも必要だと理解していたからです。詩編51編で、ダビデは自分の罪深い性質を認め、こう言っています。

「ご覧ください。私は咎ある者として生まれ罪ある者として 母は私を身ごもりました。確かに あなたは心のうちの真実を喜ばれます。どうか私の心の奥に知恵を教えてください。ヒソプで私の罪を除いてください。そうすれば私はきよくなります。私を洗ってください。そうすれば私は雪より白くなります。楽しみと喜びの声を聞かせてください。そうすればあなたが砕かれた骨が喜びます。御顔を私の罪から隠し私の咎をすべてぬぐい去ってください。神よ。私にきよい心を造り揺るがない霊を私のうちに新しくしてください。私をあなたの御前から投げ捨てずあなたの聖なる御霊を、私から取り去らないでください。あなたの救いの喜びを私に戻し仕えることを喜ぶ霊で私を支えてください。私は背く者たちにあなたの道を教えます。罪人たちはあなたのもとに帰るでしょう。神よ。私の救いの神よ。血の罪から私を救い出してください。私の舌はあなたの義を高らかに歌います。」(詩編51:5-14)

そしてダビデは、この歌を次のように締めくくっています。

「そのとき、あなたは、義のいけにえを焼き尽くされる全焼のささげ物を喜ばれます。そのとき、雄牛があなたの祭壇に献げられます。」(詩編51:19)

唯一、いったん私たちが良心を清め、唯一、いったん私たちが自分の罪深い性質を認め、唯一、いったん私たちが悔い改め、唯一、いったん私たちが聖霊を受け、そして私たちが彼の救いの喜びを楽しむなら、唯一、その時だけ、神は私たちのいけにえを受け入れられます。興味深いのは、私は世界中の教会を多く見てきて、そして巨大な建物も、たくさん見てきました。何百万ものアメリカ・ドルが教会の建築に注ぎ込まれ、素晴らしいバンド、素晴らしい…。でも、ある時、ある時点で悟ります。建物の中には、必ずしも神の御霊がおられるとは限らない。神は、ユダヤ人が神殿を建てる事には大丈夫でした。神は決して求めていませんが。しかし、神は言われたのです。「分かった。ダビデ、あなたはわたしの家を建てたいのだな。あなたはできない。しかし、あなたの息子はできる。」そして、ソロモンは直ちに神殿を建てました。しかし、そのすぐ後に、聖書はエゼキエル書^{ほふ}で告げています。神の御霊が、神の家から離れ去ったのです。彼らは、神に仕え続けました。動物を屠り、動物をいけにえに捧げ、彼らは全ての儀式を毎年、毎月、毎週続け…。神は、そこにはいませんでした。神は、神の家から去ったのです。ここにあるような建築物、エルサレムにあるような建築物、それらの建物に神が感動する事はありません。建物の中の人々が、霊とまことをもって礼拝するのでなければ。建物は、今だに立ち続けているかも知れません。しかし、神の御霊はそこにはないのです。なぜなら、大事なのは宗教ではありませんから。大事なのは、いけにえでもありません。神は言われます。「あなたがたがこれらの全てを持ってきても、あなたの心が正しくなければ、わたしは、あなたがたから顔を背ける。わたしはそこにはおらず、あなたの祈りは聞かない。わたしは、あなたを見もしない。それは、わたしが求めるものではない。わたしは、根本的に異なるものを求めている。」

ローマ人への手紙3章21-31節で、パウロは人々に語っています。ユダヤ人には利点があることを述べた後で、つまり、神の^{ゆた}ことを委ねられていることを述べた後で、彼は言います。「しかし今や…」皆さん、言ってください。「しかし今や、」言い換えると、キリストがこの世に来られました。そして今、

「律法とは関りなく、律法と預言者たちの書によって証しされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこに差別はありません」

ん。すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。神はこの方を、信仰によって受けるべき、血による宥^{なだ}め^めのささげ物として公に示されました。ご自分の義を明らかにされるためです。神は忍耐をもって、これまで犯されてきた罪を見逃してこられたのです。…」(ローマ3:21-28)

つい先日、過越し(見逃す)を祝ったばかりです。

「…すなわち、ご自分が義であり、イエスを信じるものを義と認める方であることを示すため、今この時に、ご自分の義を明らかにされたのです。それでは、わたしたちの誇りはどこにあるのでしょうか。それは取り除かれました。どのような種類の律法によってでしょうか。行いの律法でしょうか。いいえ、信仰の律法によってです。人は律法の行いとは関りなく、信仰によって義と認められると、私たちは考えているからです。」(ローマ3:21-28)

宗教があなたを救済に導き、そしてあなたを救うとは、どこにもありません。救いは、価なしに与えられるものです。それは信仰によって与えられるもので、信仰のみです。何への信仰ですか？二千年前に、十字架の上で既に終わった働きへの信仰によってです。あなたの頑張りや、神のあなたへの愛情が今よりもっと増える事はありません。神は、そのひとり子を、死ぬために遣わしてくださったのです。あなたが死ななくて良いように。聖書にはこうあります。

「神が唯一なら、そうです。神は、割礼のある者を信仰によって義と認め、割礼のない者も信仰によって義と認めてくださるのです。それでは、私たちは信仰によって律法を無効にすることになるのでしょうか。決してそんなことはありません。むしろ、律法を確立することになります。」(ローマ3:30-31)

パウロが言っているのはこうです。「私は、新しいものを与えるのではありません。神のことばは、昨日も今日も永遠に同じです。私はただ、あなたが見逃したその目的を説明しているだけです。律法は、人が全うする為に作られたのではない。」私たちは、律法を全うすることはできないんです。律法を全うすることは不可能です。キリストが律法を全うするために来られたから、私たちは、もはや罪に問われることはないのです。なぜなら、彼がすでにしてくださったからです。彼がすでに非難を受け、私たちの全ての罪を、ご自身に受けてくださったのです。だから私たちは、もはや責められることはないのです。彼は神の右に座し、私たちを、神の御前で責められることがないように代弁してくださいませ。

さて、当時ローマやエルサレムに住んでいたユダヤ人たちは、今日のユダヤ人と同様に、聖書によれば、彼らは盲目にされていました。ところで、誰によって盲目にされたのでしょうか？神によってです。なぜか？彼らが心を頑^{かたく}に^にしたからです。彼らは信じたくなかったのです。当時も、今日もそうです。聖書のローマ人への手紙11章によれば、神がそうしたのです。

「彼らに鈍い心と見ない目と、聞かない耳を与えられた」 (ローマ11:8)

「イスラエル人の一部が頑^{かたく}になった」(ローマ11:25)

聖書はそう言います。しかし問題は、クリスチャンも同様に盲目になりえるのか？私はそう信じます。聖書のヨハネの手紙第一2章11節にこうあります。

「自分の兄弟を憎んでいる人は、闇の中において、闇の中を歩み、自分がどこへ行くのかがわかりません。闇が目が見えなくしたからです。」(ヨハネ第一2:11)

言い換えると、自分を「神のことばを信じる者」だと自称しながら、互いに愛し合いなさい、という神のことばと相反する事は出来ません。言い換えると、その盲目は敵からのものであり、もちろん、その憎しみも敵からのものです。ここで、コロサイ人への手紙に注目していただきたいと思います。コロサイ人への手紙

2章には、興味深いことが書かれています。義とされる事と、律法主義について。聖書のコロサイ人への手紙2章には、こうあります。いいですか。宗教とは、これを食べるな、あれを食べるな、これをするな、あれをするな、それが全てです。彼が言ったことを見てみましょう。彼はこう言います。

「食べ物と飲み物について、あるいは祭りや新月や安息日のことで、だれかがあなたがたを批判するようなことがあってはなりません。これらは、来るべきものの影であって、本体はキリストにあります。自己卑下や御使い礼拝を喜んでいる者が、あなたがたを断罪することがあってはなりません。彼らは自分が見た幻に^よ拠り頼み、肉の思いによっていたずらに思い上がって、かしらにしっかり結びつくことをしません。このかしらがもとになって、からだ全体は節々と筋によって支えられ、つなぎ合わされ、神に育てられて成長していくのです。もしあなたがたがキリストとともに死んで、この世のもろもろの霊から離れたのなら、どうして、まだこの世に生きているかのように、定めに縛られるのですか。」(コロサイ2:16-21)

ご覧のように、全ては宗教と宗教的な霊とに相對することなのです。

「『つかむな、味わうな、触るな』これらは全て、使ったら消滅するものについての定めで、人間の戒めや教えによるものです。これらの定めは、人間の好き勝手な礼拝、自己卑下、肉体の苦行のゆえに知恵あることのように見えますが、何の価値もなく、肉を満足させるだけです。」(コロサイ2:21-23)

ですから、宗教は確かに答えではないと分かりました。そして、後ろのヴァチカンには、イエスが使徒を送ったとき、念頭におかれていたものだったのか？大聖堂に入っていくと、聖ペテロの司教座が見えます。私が最後に確認した時、ペテロはガリラヤの漁師でした。私が最後に確認した時、ペテロがカイサリアの^{コルネリウス}宅に入るところで、皆が彼の足元にひれ伏すと、ペテロは言いました。「止めてください。お立ち下さい。私は神ではありません。人を拝んではいけません。神を拝みなさい！」ですから、ご覧の通り、マリア崇拜、ペテロ崇拜、そして、入り込んだ非常に多くの規則、規定、伝統、それらは全て、イエスが良い知らせを伝えた時に、気に留めておられたものです。

では、メッセージを締めくくりましょう。大事なものは、神のみことばです。そして神のことばは人となってこの世界に來られ、私たちの間に住まわれました。彼は來られて、救いの良い知らせを与えてくださり、彼を信じる者は誰でも、価なしに聖霊を受けます。そして、あなたに聖霊があるなら神の御霊が、あなたの内にあり、その時あなたは、神のことばを、神のご性質を理解し、あなたは新しい心を受け、新しい被造物になるのです。大事なものは宗教ではない。兄弟たち！大事なものは、神との関係です。あなたには聖霊が必要です。あなたは新しく生まれなければなりません。あなたはキリスト・イエスにあって、新しい被造物にならなければなりません。アーメン。



メッセージ by Amir Tsarfati / Behold Israel :<http://beholdisrael.org/>

ビホールドイスラエル 日本語 YouTube チャンネル

<https://www.youtube.com/channel/UCLcuvC6Mr63AqwiiXDkwRVQ>

2020.06.11 (Thu)